2019/4/28　中野教会　「聖書の学び」

　　　　　　　　　**「マカバイ書：よみがえり・復活」**

聖書外典：第二マカバイ書7:7-14

　旧約と新約の間、所謂中間期の文書は沢山ありますが、カソリックでは聖書に準ずる文書として扱われてきた「外典」と言われている文書と、それ以外の文書、偽の書と書いて「偽書」と称する文書に分かれます。この外典は新共同訳聖書の続編というかたちで日本語聖書に収められています。そのうち、今日は「マカバイ書」というのをとりあげます。実は、マカバイ書というのはいくつかあり、第一マカバイ書と第二マカバイ書が外典に入っており、第三マカバイ書と第四マカバイ書は偽書に分類されています。第一マカバイ書はマカバイの対シリア反乱に始まるマカバイ期の前半を記述した歴史書です。マッタテア、ユダ・マカバイ、ヨナタン、シモン、ヨハネ・ヒルカノスI世までです。記述の仕方は、サムエル記や列王記を似せて書かれています。中心はユダ・マカバイの時代です。第二マカバイ書はシリア王アンティオコスIV世エピファネスによる迫害とそれに抗した殉教者たちの物語とその後のユダ・マカバイのシリアとの闘いを舞台として、ユダヤ教を守護すべきことを叙述した文書です。歴史書ではなく、ユダヤ教擁護を物語りを通して語っている文書です。この二つが外典に収められているマカベア書です。偽書である第三マカベア書はマッタテアの反乱の前、エジプトのプトレマイオスIV世フィロバトルが王であった頃の物語です。ヘレニズム文化を強要するフィロバトルにユダヤ人は反抗し、ユダヤ人長老エレアザルの祈りにより、二人の天使によって象の軍が破られ、エジプト王は悔い改めて没収したすべての財産をユダヤ人に戻す、というものです。ユダヤ人はこれを記念して祭日を定めたとされています。エステル記に記されたプラム祭と同一と考えられます。この祈りをしたエレアザルは第二マカバイ書にも登場する殉教者ですが、時代的にも第一、第二マカバイ書に近いことからマカバイ書の名がつけられた、と推測されます。第四マカバイ書はやはり第二マカバイ書の時代の一部を時代背景とした哲学書です。殉教者の信仰を讃えた文書です。「敬虔な理性」が情念を支配することによって殉教者は信仰を守り通した、ということです。エレアザル、七人の若き兄弟、その母の計九人の殉教者が主人公です。

　中間期に新約に繋がるいろいろな思想が深められていったわけですが、その思想はパリサイ派の思想の中に良く示されています。AD1ｃのユダヤ人歴史家にヨセフスという人物がいます。彼はAD66-70の第一次ユダヤ戦争において軍隊の指導者でしたがローマ軍に敗れ、その後、ローマの顧問のような立場でユダヤ史を記述しました。彼は、『ユダヤ古代誌』XIII巻5:9で「ユダヤ人の三つの宗派」について述べています。パリサイ派、サドカイ派、エッセネ派の三つです。パリサイ派の主張の特徴は①神の摂理的支配の絶対性、即ち運命を認めること、②死後の復活と死後の世界を信じること、③御使い、天使の存在を信ずること、④終末論、即ち苦難の後、将来における神の裁きと神の全面的支配の時がくること、⑤メシアの到来を信ずること、即ち、異邦人の軛からイスラエルを解放し、主なる神への信仰が復興すること、の5つです。これらの派は、マカバイ家の建てたハスモン王朝の下で生まれた宗教グループです。パリサイ派はユダヤ社会の中産階級を基礎とする宗教集団で、マッタテアの反乱を支持した敬虔主義者・ハシディームの流れをくむ人たちで、「律法」の研究を熱心に行い、これを遵守することを信仰の真髄としています。モーセ五書に示された律法のみならず、その解釈が口伝として伝わっていたミシュナーも律法の一つとして遵守します。また、伝道熱心であり、民衆の指導者として律法学者・ラビが律法を説きました。ヨハネ・ヒルカノスI世の頃、派が形成され、そのあとのアレキサンドロス・ヤンナイオスの時代に大迫害を受けましたが、むしろ勢力拡大し、その妻アレクサンドラ女王の時代には権力をほしいままにしました。しかし、アレクサンドラの死後は再び弾圧される状況になりました。ユダヤの貴族・神殿祭司集団であるサドカイ派と鋭い対立をしていました。上流階級と中産階級の対立といえるでしょう。

両者の対立点の一つに「よみがえり・復活」をめぐる神学上の相違がありました。本日はその「よみがえり・復活」の思想がどのようにして形成されていったか、をたどりたい、と思います。まず、マカバイ書で「よみがえり・復活」が述べられている箇所をあげます。本日の聖書箇所として挙げた部分です。BC175年にシリア王となったアンティオコスIV世エピファネスはBC167年に文化宗教統一政策を発令し、神殿が穢され、宗教的迫害が本格化しました。そのなかで皆から尊敬を集めていた律法学者エレアザルが豚肉を食べるよう強制された、周りの者はこの豚肉の代わりに持ち込んだ「清い肉」を食べるよう勧めました。これに対し、彼は「我々の年になって、嘘をつくのはふさわしいことではない」として、自分から責め道具の方に行き、鞭に打たれて死にました。続いて、七人の兄弟が母親とともに捕えられ、豚肉を食べるよう強制されました。第一番目の子は「我々は父祖伝来の律法に背くくらいなら、いつでも死ぬ用意はできているのだ。」と言って、舌を切られ、頭の皮をはがれ、あちこち、そがれて、最後はかまどの火で焼かれました。二番目の子も同様です。これに対し、二番目の子が言ったのが、聖書箇所の最初です。「世界の王は、律法のために死ぬ我々を、永遠の新しい命へとよみがえらせてくださるのだ。」という言葉です。この「よみがえる」は後に「復活する」の意味で使われるようになるギリシャ語の「anaste:mi」です。ヘブル語では「生きる」を意味する「ha:ya:」です。三番目の子も同様に舌を差出し、「わたしは、主からそれらを再びいただけるのだと確信している。」と言い「苦痛をいささかも意に介さない」態度を示します。更に、四番目の子は死ぬ間際に「たとえ人の手で、死に渡されようとも、神が再び立ち上がらせてくださるという希望をこそ選ぶべきである。だがあなたは、よみがえって再び命を得ることはない。」 と言います。「再び立ち上がらせてくれる」というのは「よみがえる」ことです。そして迫害をしている人々は「よみがえる」ことはない、と言っています。この両方とも、ギリシャ語は「anaste:mi」が使われています。そして、五番目、六番目、七番目の子も迫害で殺されます。最後に母親は息子たちに「人の出生をつかさどり、あらゆるものに生命を与える世界の造り主は、憐れみをもって、霊と命を再びお前たちに与えてくださる。それは今ここで、お前たちが主の律法のためには、命をも惜しまないからだ。」と言い放ちます。このように、「よみがえり・復活」は殉教者に対し、主なる神は再び命を与えるに違いない、という確信から生まれています。イスラエルの信仰において、肉体と魂は一体のものと考えられていましたから、「よみがえる」ということは肉体も魂とともに「よみがえる」のは当然のことと考えられていました。むしろ、神との関係が再び与えられると言う魂のよみがえりが主たる関心事であり、肉体も同時によみがえる、ということです。

では、この「よみがえり・復活」は旧約聖書、そして中間期の文書ではどのように扱われているかを見ていきます。まず最初に申し上げておくべきことは、この「よみがえり・復活」はイスラエルの当初からの思想・考え方ではない、ということです。イスラエル民族は個々人はイスラエル共同体の一員として意味があるのであって、個人が独立した価値が認められた社会ではありませんでした。従って個々人が甦る必要はなく、イスラエルのメンバーとして記憶されれば、その個人は生きることになる訳です。イスラエルの系譜の中に入れられ、イスラエルの 墓に葬られることが重要なのです。創世記に書かれているように、イスラエルの墓に入れられなければ、その生涯をまっとうに生きたことにならない、のです。個人が歴史上意味があるのは指導者についてです。この個人がイスラエルの運命に影響を与える存在だからです。指導者の罪即ち主なる神からの離反は共同体全体の責任になります。また、共同体の罪はそれを是正する指導性を発揮できなかった指導者の責任でもある、とされます。旧約聖書でも「よみがえり・復活」を述べている箇所があります。列王記上１7:17以降のエリヤによる、子供の再生です。17:22に「主はエリヤの願いを聞かれたので、子どものいのちはその子のうちに返り、その子は生き返った。」とあります。「生き返った」は先ほどのよみがえり、の時のヘブル語で「ha:ya:」です。イスラエルの信仰において「死」は何をさておいても主なる神との関係の断絶であって、肉体的死を指しているのではありません。肉体は神の意志により、どうにでもなることのです。この箇所は、神の恵みのいのちはまだ生きており、肉体的死のみが起こった状態と見られている、と解釈できます。このような例は、列王記下4章で預言者エリシャがシュネムの女の子どもを生き返らせたところにも出てきます。新約聖書においてもヨハネ福音書11章の「ラザロの復活」がそうです。但し、肉体を失うと魂も生前のような活動をしている訳ではなく、眠りにあるものと考えられていたようです。肉体が朽ち果てると、魂の寝た状態が続き、神の特別な力が働かなくては魂と体の生きる状態には戻りません。このような考えからすれば、これら子供のよみがえりは霊的死には至っていない状態で、預言者の神からの力の証明として肉体的よみがえり・復活が起こされた、と考えるべきです。このいずれのケースにおいても天地がひっくり返るような奇跡が起こった、というようには書かれていません。それは、魂の死、即ち、聖書の言う「滅び」に至ったところからの「よみがえり・復活」ではないからです。あくまでも軸足はたましい、です。子供は神との断絶をもたらすような罪をおかすところにまで至っていません。

その他、旧約聖書で「よみがえり・復活」に関係のありそうなところをいくつか見てみます。まず、イザヤ書26:14です。「死人は生き返りません。 死者の霊はよみがえりません。 それゆえ、あなたは彼らを罰して滅ぼし、 彼らについてのすべての記憶を 消し去られました。」とあります。この頃から、個人は個人としての存在意義が認められ単純に共同体の一員に過ぎない、という見方が変わって来ています。ここで言う「死人」は魂も死んだ人です。記憶を失っているのですから共同体の一員としての存在も失われています。霊肉ともに大自然に戻され、かつて生きた痕跡も失っている人んぼことです。ここで「よみがえる」と言われているのはヘブル語で「ku:m」で立ち上がる、という意味の言葉です。先ほどの「生きる」の意味の「ha:ya:」ではありません。霊的に死んだ人は「生きている」ということにはなりません。次の、このすぐあとの26:19「あなたの死人は生き返り、 私のなきがらはよみがえります。 さめよ、喜び歌え。ちりに住む者よ。 あなたの露は光の露。地は死者の霊を生き返らせます。」とあります。24:14とは逆の事を言っています。「あなたの死人」の「あなたの」は「神様の」の意味です。死人は死人でもここでの「生き返り」は「生きる」の「ha:ya:」です。「神の人」は死んだ後、魂を注ぎ込まれ、生き返ったのです。そしてからだもよみがえります。死者の霊もよみがえります。神の意志の差がこの差を齎します。神が自らの民とした人には魂のよみがえりと、それに伴う体のよみがえり・復活があるということです。

その他、詩編16:10「まことに、あなたは、私のたましいを よみに捨ておかず、 あなたの聖徒に墓の穴をお見せにはなりません。」、詩編49:15「しかし神は私のたましいを よみの手から買い戻される。 神が私を受け入れてくださるからだ。」等、「よみがえり・復活」に関連のありそうな箇所がいろいろあります。この詩編49:15は「神が私の魂を買い戻される」と言っており、注目に値します。その他ヨブ記、ホセア書、伝道者の書にもありますが、エゼキエル書37章の「生き返る骨」が有名です。干からびた骨が神により息を吹き入れられ生き返るのです。37:5には「 神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。」とあります。エゼキエルはエレミヤとほぼ同時代の預言者です。ユダ王国の滅びの時の預言者で、バビロンに連れて行かれ、そこでこの預言を致します。これはユダヤの民への希望の言葉であるとともに、エルサレム帰還を夢見ているエゼキエルへの希望の使信でもあったでしょう。そして旧約最初の黙示文学でもあるダニエル書に行きます。この文書は最終的にはマッタティアの反乱が始まる直前にまとめられたと考えています。アラム語とヘブル語が混ざっている文書としても有名です。7章において主イエス・キリストの予型が示されている、というのでも有名です。前半はバビロンにおける信仰者に現れた奇跡の話ですが、後半はエジプトとシリアの戦争の下での敬虔な信仰者の黙示です。12:1-4をお読みします。「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの

苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。/地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。ある者は永遠のいのちに、ある者はそしりと永遠の忌みに。/慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。/ダニエルよ。あなたは終わりの時まで、このことばを秘めておき、この書を封じておけ。多くの者は知識を増そうと探り回ろう」とあります。これは主の日に大天使ミカエルが現れ、「その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。/地のちりの中に眠っている者のうち、多くの者が目をさます。」と言われています。「よみがえり・復活」の言葉はありませんが、「地のちりの中に眠っている者」即ち、肉体的死にある多くの魂が目を覚ます」と言われています。黙示的表現になっていますが、これはイスラエルの伝統の中にある「よみがえり・復活」です。よみの国ハデスに行ったのは「魂の死」即ち滅びに定められた者ですから、ここでのよみがえり・復活にはあずかれません。なお、主イエスは「よみの国」に行ったとされていますから、神の恵みの及ばない魂の死のところまで行かれた、という点が重要です。旧約の伝統からは「よみがえり・復活」の対象から完全に外された方が「よみがえり・復活」をされた、という点が重要です。その意味で、ダニエル書のイエス・キリストの予型というのは浅い解釈だと思います。言葉尻だけの解釈をしていると、新約の本当の意味での新しさ、主イエスの福音たる所以がわからなくなってしまいます。

　そして中間期の種々の文書の時代になります。その最初が最初にお話した第二マカバイ書です。先ほど七人の子どもの殉教のところに現れた「よみがえり・復活」のところを見ましたが、第二マカバイ書についてはここに留まりません。ユダ・マカバイが戦死者のために祈願と贖いのいけにえを献ずるところがあります。12:43-44をお読みします。「次いで、各人から金を集め、その額、銀二千ドラクメを贖罪の献げ物のためにエルサレムへ送った。それは死者の復活に思いを巡らす彼の、実に立派で高尚な行いであった。 もし彼（ユダ・マッカビー）が、戦死者の復活することを期待していなかったなら、死者のために祈るということは、余計なことであり、愚かしい行為であったろう。 」とあります。戦死者もあるいみで殉教者ですから、ここでの「戦死者の復活」は殉教者の復活の系統に属する考え、と言えます。「復活」の言葉は新約でも「復活」の意味で使われるギリシャ語「enaste:mi」です。更に、14章にシリア王デメトリオすI世の部下ニカノルによって殉教したラジスの物語があります。14:45-46をお読みします。「息絶え絶えであった彼は、それでもすさまじい形相で立ち上がった。血は噴き出し、深手にあえぎながらも、彼は群衆の中を駆け抜け、高い岩の上に立った。 血を流し尽くした彼は、はらわたをつかみ出し、両手に握り、これを群衆目がけて投げつけ、命と霊とを支配しているお方に、 これらを再び戻してくださるように、と祈りつつ息絶えた。 」とあります。「これらを再び戻してくださるように」と祈るところは復活への確信の表明と解釈できますやはり殉教者の物語にかかかる「よみがえり・復活」です。第二マカバイ書の「よみがえり・復活」は一言で言えば「殉教者のよみがえり」です。ヘレニズム時代以降のユダヤ人の離散が進む状況の中では、個々人の死がイスラエル共同体の系列に入る、ということでは納得的な説明ができなくなってしまっていたのです。またユダヤ社会が分断されている状況では、この共同体にすべてを奉げることにより神とのつながりを確保することが到底できなくなっていたのです。ましてや「殉教者」という不条理な死に方をした人が、このまま不条理なままで放置されることはありえない、主なる神の何らかの働き、恵みが与えられるはずだ、という信念が裏側にあります。「よみがえり・復活」は最大の恵みのしるしです。

「よみがえり・復活」に関連しては、次は第一エノク書とかエチオピア語エノク書とかエノク黙示録と呼ばれている文書です。エノクは創世記に一寸出てくる人物で、死を見ず天にあげられた義人の一人、とされている伝説的人物です。その名を冠した黙示文書です。ハスモン王朝成立後でエッセネ派が分裂し、クムラン教団形成のころの文書と考えられます。パリサイ派は大弾圧を受けているころの文書です。この文書には「人の子」の表現が多数見られることで有名です。この言葉は本来、メソポタミアでの「本来の罪なき人間」即ち、罪に堕ちる前のアダムを指した言葉です。この言葉は新約の時代に到り、主イエスは自らをさして「人の子」とおっしゃっています。また、終末の時、天より来る者として「人の子」が使われています。このエノク書に「よみがえり・復活」を意味すると思われる箇所があります。92:3「義人は眠りから醒めて立ち、義の道を歩む。そのすべての道と道程は永遠の恵みと慈悲のなかにある。」とあります。「義人は眠りから醒めて立ち」のところです。これは死者のうち義人は眠りより目を覚ます、即ち「よみがえり・復活」です。このよみがえりの条件は「義人」です。ヘブル書10:38で「義人は信仰によって生きる」とされています。そのもとはハバクク書2:2の「正しい人はその信仰によって生きる。」です。義人は「正義」（tsedaka:）に歩む人です。「正義」とは寡婦、みなしご、のような弱い人々を助けることです。そのような人は終末の日に眠りから覚まされるのです。魂の滅びを経験せず時を待っていた人ということになります。103:4をみると「義のうちに死んだきみたちの霊魂は救われて喜ぶ。彼らの霊魂は滅びず、彼らは大いなるお方の前に世々に亘っておぼえめでたい。よって彼らの中傷を恐れるな。」とあります。やはり義人が霊魂の滅びを経験せず救いの時を待っていると言う訳です。この後には罪人の事が書かれており「彼らの魂は黄泉にひきおろされ、たいへんみじめな悲惨なめにあうであろう。」と言われています。

　次の文書は「シリア語バルク黙示録」と称される文書で「第二バルク書」とも言われています。AD70年のローマによるエルサレム崩壊の後の文書です。「バルク」というのはエレミヤの書記でエレミヤの預言を書き記した人物とされています。彼自身も預言者の一人とされ彼の名を冠した文書がいくつかあります。このバルク黙示録は偽書ですが第一バルク書は外典として共同訳続編に入っています。バルク黙示録はエレミヤなきあとのイスラエルへの救いを痛切に望みが黙示のうちに語られます。その第二部30章に「よみがえり・復活」が語られます。30:1-2をお読みします。「そののち、メシアの滞在の時が充ちて彼が栄光のうちに帰還されるとき、そのとき、彼に望みをつないで眠っていたものはみな復活するであろう。/そのとき、一定の数の義人の魂のしまってある倉が開き、（その魂が外に）出てきて、多くの魂が思うところをひとつにし、みな一団となって姿を現すであろう。さきのものは喜び、あとのものも悩むことをやめるであろう。」とあります。メシア信仰と結びついており、メシア到来の時、眠っていた者が復活する、と言われています。この「復活する」は「再び立ち上がる」です。35章―47章にはバルクの見た幻が語られていますが、言葉遣い等ダニエル書の幻の影響がある、と言われています。新約聖書最後の文書であるヨハネ黙示録は新約におけるダニエル書と称せられるときもありますが、このバルク黙示録はその両文書のつなぎ的な意味もあるかもしれません。

　そして最後が エズラ黙示録とも称せられているエズラ記（ラテン語）です。第四から第五エズラ記までを含んでいます。外典です。AD100年ころの文書でありエズラの黙示の形をとって信仰者のあるべき姿を語っています。エズラは旧約聖書エズラ記のエズラですが、ユダヤ教を確立した律法学者・ラビとして著名であり、ユダヤ教徒より敬意をもってみられ、彼の名を冠した黙示文書が複数書かれました。その一つがこのエズラ黙示録です。これはキリスト教的な黙示とユダヤ教的な黙示の混淆です。そのキリスト教的黙示の2:23には「死人を見つけたらその場で印をして、墓に納めよ。そうすれば、わたしは人々を復活させるとき、お前に第一の座を与える。 」とあります。「復活させる」という部分は新約の「復活」と同じ言葉が使われています。ラテン語で「resurrectio」です。「復活、回復」を意味する言葉ですが、「再び立ち上がる、再考する」という意味の「resurgo」に通ずる言葉です。英語の復活「resurrection」の元になったことばです。旧約聖書のラテン語訳ではこの言葉は使用されておらず、第二マカベア書で初めて使用されている単語です。「resurgo」が「よみがえり」の訳で使用されています。更に2:29-31を見ると「わたしの手がお前を覆い、お前の子供たちはゲヘナを見ることはないであろう。 母よ、子供らと共に喜べ。わたしがお前を救い出す。」これは主の言葉。/「永眠したお前の子供たちを思い出せ。わたしは地の隠れ場から彼らを連れ出して、彼らに憐れみの業を行おう。わたしは憐れみ深い神。」これは全能の主の言葉。 」とあり、エズラが死んだ子を持つ母親に神の憐みがその子らを蓋う、と言っています。直接的な「よみがえり・復活」ではありませんが最後の日まで神がこの子らを守り、甦らせることが込められています。更にはユダヤ教黙示録の後ろの方の14:34-35には「もし、あなたたちが知性を制御し心を培うならば、あなたたちは生きている間、守られ、死後も、憐れみを受けるであろう。 /死後、生き返るときに裁きが来るからである。そのとき、正しい人々の名が明らかにされ、不敬虔な人々の行いも、あらわになるであろう。 」とあり、死後に裁きの時が来て、そのとき正しい人と不敬虔な人が区別されるとあります。あくまでも正しい人即ち義人が「よみがえり・復活」に与ることが前提になっています。この文書の付録となっているキリスト教的黙示の15:36以降は「終末への主の僕の準備」と称せられている箇所がありますが、この終末の日の描写は主イエスがおっしゃられた主の日の描写と極めて類似していることが注目されます。

　そして新約の時代に入ります。中間期から新約の時代にかけてギリシャ文化の影響が多分にあります。「よみがえり・復活」との関係で言えば、ギリシャ文化は基本的に霊肉二元論です。中間期黙示文書を見る限り顕著な形での霊肉二元論は見当たりません。霊肉一体となった魂の「生きる」「死ぬ」が問われているように思われます。パリサイ派、エッセネ派に関する限りはこの霊肉一体の魂の復活という考え方は維持されていました。しかし、サドカイ派は肉を伴った復活は否定していたのですから、ギリシャ文明の霊肉二元論の考え方が中心的教えだったと思われます。ハスモン王朝はシリアのヘレニズム文化への反発に始まったのですが、その権力が確立してくるとギリシャ文化を受容するようになっていきました。その支配層の担い手がサドカイ派でした。したがって、当時のユダヤ人社会で、現実の生活の次元では霊肉二元論が当たり前になっていたのではないか、と考えられます。むしろ、黙示の世界だからこそ、伝統的なイスラムの霊肉一元論としての魂の「よみがえり・復活」の観念が生き続けられたのかもしれません。新約の時代にはこの霊肉二元論はグノーシス派の教えとして再登場致します。現実の社会を否定的に見て、死後の世界を聖なるものとする考え方です。キリスト教正統派はなんとか霊肉一元論を守ります。ヨハネ文書や時にはパウロの手紙にも霊肉二元論の影響と見まがうような箇所もありますが、三位一体の教理によって霊肉一元論を守り切った、と言えるのではないか、と思います。

　霊肉と「よみがえり・復活」との関係については第一コリント15:44が面白い言い方をしています。「 血肉のからだで蒔かれ、御霊に属するからだによみがえらされるのです。血肉のからだがあるのですから、御霊のからだもあるのです。」とあります。イスラエル信仰の中心は主なる神と繋がった「生ける魂」です。ヘブル語では本来「息」の意味の「nefesh」または「nesha:ma:」、ギリシャ語も本来「息」という意味の「pushxe:」、ラテン語「anima」、英語「soul」です。その魂の中身として霊があり、魂の存在の仕方が体です。霊の方は、ヘブル語は本来「風」の意味の「ru:aha」 、ギリシャ語も本来「風」の意味の「pneuma」、ラテン語「spirital」、英語「spirit」です。「御霊のからだ」というのがあって、その御霊とからだが一体となって人間の「魂」となるのです。この「nefesh」は「のど、首、息」という意味に加え「生き物、人、人々、個性、個人、命」という意味もあります。霊肉一元の魂という時の魂は本来の人間「アダムの子」「人の子」で言う「人」のことなのです。従って、ここで「御霊のからだ」とは「本来の人のからだ」です。そのからだが、物質的な肉体として存在するのか、通常の人間の目では識別できないかたちでの体なのかは副次的なことです。体の存在形態はいくつかの在り様があるのでしょう。宇宙物理学におけるダークマター、ダークマテリアルのことなどを考えると、今我々には理解できていない存在の仕方があるのであろう、と想像するのはおかしなことではありません。エマオの途上での主イエスは弟子たちに見えない形と見える形で姿をみせました。

　以上「よみがえり・復活」について旧約・中間期文書を見てきました。イスラエルの伝統的な考え方、そして中間期文書なかでも黙示文書での継承を見てきました。物理的な在り様は二次的なことで神と繋がっていること「生きる魂」としての人が重要なのだ、というのがイスラエル信仰の基本であり、それはキリスト教の世界では三位一体の教理によって維持されていることが解りました。しかし、主イエスの復活はそれまでの「よみがえり・復活」とは次元の差があります。イスラエルの伝統は義なる人が死ぬことによって死者の国で眠りに有るところを「よみがえらせられ」、からだも与えられるのです。裁きにより黄泉の国に行った罪ある者は生き返らないのです。しかし、主イエスは黄泉の国にまで行きそして「よみがえり・復活」しました。義人の復活とは違うのです。罪に定められた者が復活したのです。義人じゃあなくても復活できる希望がしめされたのです。その意味で、キリスト教はイスラエルの伝統やユダヤ教の教えとは異なります。　むしろ、イスラエルの伝統の更に深みで「苦難の僕」の「よみがえり・復活」にまで至った、と解釈することが出来るでしょう。それぞ「福音」です。

旧約と新約の繋がり方を見る時は、必ず、継続と断絶の両面からみなくてはなりません。旧約のユダヤ教正統的信仰の流れの中では「義人」の復活は割合自然な流れで出てきます。創世記におけるアブラハム、アビメレク、エノクから繋がっています。しかし、主イエスの場合は単なる義人の復活とは異なります。罪人とされた義人の復活なのです。また、伝統的な義人の復活は死して眠りにある人の復活です。しかし、主イエスの復活は罪に定められた人の行く「黄泉」に行かれた方の復活です。ここにはユダヤ教の伝統からの断絶があります。「断絶」という言葉は不適当かもしれません。むしろ、イスラエル信仰の更なる深化と言うべきかもしれません。この「罪人とされた義人」はイザヤ書53章の「苦難の僕」に源を見ることが出来ます。ここに「罪ある者とされた義人」を見ることができます。祈ります。

　（ご在天の父なる神様、今日は「よみがえり・復活」について中間期の思想の流れを見ました。そして、主イエスの復活が旧約の一段深いところから発している、ことも見ました。どうか我々を、復活の主イエスの弟子とさせて下さい。神の国の証人（あかしびと）としてひたすらこの世を歩む者とさせてください。み名により祈ります。アーメン）